

Stage Up

2004年

4

月号

生涯学習情報誌
ステージ・アップ
通巻 No. 129



「なの花のある風景」 版画：浪江年博

- もくじ**
- 2 特集 インタビュー 阿部孝夫・川崎市長
 - 6 生涯学習ア・ラ・カルト
 - 8 イベントパーク

発行・(財)川崎市生涯学習振興事業団
〈ホームページ〉 <http://www.kpal.or.jp>

〒211-0064 川崎市中原区今井南町514-1
TEL 044 (733) 5560(代) / FAX 044 (739) 0085
TEL 044 (733) 5811 (ステージ・アップ直通) E-メール: stage-up@kpal.or.jp

特集

インタビュー

阿部 孝夫・川崎市長

2001年11月、阿部孝夫市長が誕生。市長に就任し2年余り、阿部市長は「活力とうるおいのある市民都市・川崎」をめざして各区でタウンミーティングを開催し、市民の声に耳を傾けました。さらに産業界や教育界のリーダーとも積極的に対話を重ね、また職員からも建設的な意見を吸い上げるなど、行財政改革に向けた独自の手法で果敢に取り組んでいらっしゃいます。

このたび小誌では、阿部市長にお話を伺う機会を得ました。お忙しい公務の中、子ども時代のことやご自身の趣味のことなど、気さくに話してくださいました。生涯学習については「大勢の市民が生きがいを持って学んでいることはよいこと。それ以上に川崎には教える力のある市民がたくさんいる。その人たちが十分に力を発揮して次代の生涯学習を担えるような仕組づくりを」と持論を展開されました。



自ら考え道を拓く

—まず、市長の子ども時代のことから伺いたいと思います。市長は7人兄弟の末っ子と聞いていますが、小さいころどんな環境でお過ごしになられたのでしょうか。

市長 福島県の田舎で生まれ、周りたんぼと畑ばかりでした。家は農家で、主に米づくりと養蚕をしていました。小さい頃は藁葺き屋根の家に住んでいました。藁葺き屋根の家といっても民家園にあるような、値打ちのあるものではないですから、壊してしまって、今は新しい家になっていますけれどね。そういう所で育ちました。

子どものころの遊びというのと、とにかく自然の中を駆けずり回ったり、魚を獲ったりという毎日でした。スポーツも好きでした。かけっこはそんなに速くはなかったですが、投げたり、跳んだりするのが得意でした。中学時代は砲丸投げの選手だったんです。それから相撲が強かったんです。身体があまり大きくならなかったんで、お相撲さんにはなれなかったんですけど、お相撲さんになりたかったですよ。

—周りからはどのように見られていましたか。

市長 あまり手間のかからない元気な子どもだったようです。自分では物分かりが良かったんじゃないかと思っているのですがね。親に叱られたことがないんですよ。姉が3人、その下に兄が3人で、兄たちはよく怒られていましたけど、私は怒られたことがないのです。親にとって私は孫みたいな感じだったのでしょね。怒るのが面倒になったのかもしれませんが。放任されていたんですね。好きなことをやってのびのびと育ちました。その代わり姉は厳しかったですね。上の姉とは15歳も年が離れていて、小さい時はなにかと面倒をみてもらい、親子みたいでした。ほとんど姉さんに育てられたようなものですね。

—先ほど小さい時はお相撲さんになりたかった、とおっしゃっていましたが、その後夢はどう変わりましたか。

市長 姉さんたちが看護婦をしていましたので、小学校高学年ころにはお医者さんになりたいと思いましたね。高校進学の時までは理科系を志望していました。高校生になってから行政や政治に関心を持ち始めました。時代は60年日米安保闘争の時でしたから。社会科の先生から聞いたことが影響して

いるのかもしれませんが。政治の仕組みや制度、それらの矛盾について、その先生からいろいろ話を聞かされ「これはおもしろいものだな」と感じました。そして思想的なことを勉強するようになりました。ただ単にいい成績をとって、いい学校に行くだけではだめだと思うようになり、行政について関心を持つようになりました。

—今の子どもたちは、物質的には恵まれていても夢を描きにくいように感じます。市長は「小さな失敗を繰り返すことで子どもは育つ」ということもおっしゃっていますが、失敗を経験する場も少ないように思うのですが…。

市長 親の子育ての問題は、どうでもいいことに親が細かいことを言いますね。親がゴチャゴチャ細かいことを言って「子どもは従いなさい」という教育です。昔は今みたいなせちがらい世の中ではなかったから、父親が子どもに言っていたことは「人様に迷惑かけるな。自立しろ」というぐらいで、多少のことならどうということはない、と容認していました。今はその反対で人様に迷惑をかけることについては平気で、細かいことを言い過ぎる。もっと自己主張しなさいとか、成績を上げなさいとか…。

昨年7月にオープンした「子ども夢パーク」の開所式で子どもに鍵を渡す市長



いろいろなことを子どもに求めすぎる、ここが問題ではないかと思うのです。ちょっとところで泥だらけになっても、それを失敗だと思ってしまう。赤ん坊が泣くと、泣かせる親は失格だと思ひ込んで、躰と称して親が子どもを叩いたりする。子どもは泣くのが運動なんだということを親世代に教えておけば、むやみに叩いたりしなくなる。そういう大事なところが抜けているように感じます。

—子どもの育ちがそのまま親自身の評価につながってしまっているところに問題があるように思うのですが…。

市長 そういふことがあるかもしれませんが。自分が少しこいう点に気をつけていれば、もう少し偉くなっただろうとか、もっと金持ちになっただろうとか、そういうことを子どもに押し付けてくるわけです。子どもに失敗させたくないといろいろ口を出すのはよくないことです。親に注意されて失敗しないようにするのでなく、自分で失敗を経験して乗り越えて行くというやり方でないと、子どもは成長しないでしょう。取っ組み合いの喧嘩や小競り合いを経験していなければ、手加減がわからない。だから、たいしたことでもないのに殺してしまう。

「子ども夢パーク」で遊ぶ子どもたちの様子を見守って



先日、教育委員の先生方と面談したのですが「小学校1年生の最初のころは、勉強よりも集団生活に慣れさせることと、体を動かすことが大事ではないか」と話したんですよ。

—次代を担う子どもたちにどんなことを期待されますか。

市長 体力があって、知恵のある子ども、つまり物事を適切に処理していける判断力のある子どもに育ててほしいですね。子どもは色々なところで未知なものに出会い、さまざまな問題にぶつかっていきます。その問題を自分の力で解決できるようにしてほしいですね。それには、小さな失敗を繰り返すことが、その子の力を養うことになると思うのです。

—ところで、今度は市長の趣味についてお聞きしたいのですが、カラオケがお好きで「カラオケは世界文化」というエッセイも書かれたそうですね。カラオケの魅力はなんですか。

市長 私は、人に自慢できる趣味がそんなにないんですよ。カラオケは声を出して出来る簡単な自己表現であるところが魅力ですね。カラオケは、日本のオリジナル文化なのです。明治以後、日本が経済的に豊かになりましたが、国際社会に浸透している文化はそんなにありません。カラオケは文化ではないとの異論もあるかもしれませんが…。カラオケは、日本発の文化で、浮世絵や歌舞伎と比べるとはるかに国際的影響力が大きい。カラオケは昭和47・8年ごろ歌のない歌謡曲を楽しもうという発想から大阪で生まれましたが、あまり受け入れられませんでした。それを東京でやったところ発展したという経緯があります。カラオケの機械とノウハウは純日本、歌の中身は国際的です。昭和50年頃、カラオケが日本で普及し始めた時、いわゆる文化人と言われる人たちは、「日本的なものは世界に広がらない」と言い切っています。「日本的なものだからこそ、世界に広がる」というのが私の持論ですが、実際には、アジアで広く支持されオーストラリアにも中国にも広がり、アメリカやヨーロッパでも「karaoke」で通用するようになりました。

中国ではカラオケを楽しむことは高級な文化になっていきます。ヨーロッパでもそうです。金持ちでないとカラオケが楽しめない。日本とは受け取り方が全然違いますね。貨幣価値が違うので一概には言えませんが、金額で換算する限り、日本のカラオケはヨーロッパのクラシックに近い値打ちがあると思うのです。

市民まつりであいさつ(昨年11月、富士見公園にて)



——話は7月にオープンする「ミュージア川崎シンフォニーホール」へと飛びますが、2000席を擁するハイレベルなコンサートホールや、市民が気軽に演奏会を開くことができる市民交流室、練習室などが用意されていると聞いています。ミュージアからどんな文化が発信されるかとても楽しみです。「音楽のまち・かわさき」をキーワードとしてどんな都市像を描いておられますか。

ミュージア川崎から 独自の文化を創る

市長 富士山を考えていただければいいんです。文化というのは洗練度の高いものはそれなりにお金がかかります。川崎の文化を見るとき、裾野が広いだけでなく高さがないとダメです。全員が高みにいる必要はないと思います。富士山を見ることができる、たまには登ることもできる、ということが大事です。と同時に普段は裾野のところではそれぞれの好みの音楽を楽しめる状態であればいいのです。

ミュージア川崎はギリシャ・ローマのすり鉢型の劇場と同じで、マイクがなくてもすみずみまで音が広がり、生の音楽を聴くことができるという特徴があります。ですから、それにふさわしい演奏ができる東京交響楽団にホールを本拠地として活動していただくことになったのです。課題は、音楽にもさまざまなジャンルがありますので、音楽だけでどういう組み合わせを作っていくかです。

私が、音楽アドバイザーのみなさんに注文しているのは、「ヨーロッパのものまねはやめてほしい。川崎を植民地にするような発想ではだめだ」ということです。私の友人でアドバイザーになった小椋佳さん(作詞・作曲家)は「ワインヤード形式の舞台はやりにくい。幕があって、舞台が一方からしか見る事ができないものでないと、今までやったことがないから難しい」と渋りました。私は「建物を作って魂を入れないというのは、今の地方自治体の悪いところだ。それを崩したいからあなたにお願いしたんだ。失敗してもいいから、まず川崎で新しいことをやってみて、お客さんが喜ぶようなら全国展開をして磨き上げて、完成度が高くなったらもう一度川崎に戻ってきて」と頼みましたら「やってみましょう」と言ってくれました。

——実験的な場所というような感じでしょうか。

市長 実験的でも何でもいいんです。ただ単によそで評価された良いものだから、このホールに持ってきて川崎の人も味わうというのではなく、何が本当にいいかを自分たちで判断

して、今までになかったような新しいものを川崎で創り出してそれを日本中あるいは世界中の人に楽しんでもらう。ジャンル間の交流とか、映画との交流とかいろんな形での交流をベースにしてオリジナルなものを発信していく、しかも国際社会に発信できるようなそういう拠点にしたいというコンセプトを示してあります。

——多彩な音楽空間になりそうで楽しみです。

市長 お客さんは川崎市民だけだと思ったら失敗します。横須賀から東京は北区まで対象に入れないと成り立たないです。人が集まる場所として、そこまで射程距離として富士山の頂上の音楽を聞きに行く位置付けとして考えていきたい。川崎駅西口から歩いて1分とアクセスは抜群なんです。あとは、音楽以外の文化・芸術とどうつながるかです。他の文化・芸術でも、富士山のどこかに位置するものがあれば大事にしていきたい。それぞれ裾野のところで音楽と一緒に川崎の文化をつくってもらいたい。たとえば沖縄の舞踊は、沖縄の本土を除いては川崎が日本一盛んです。そういうものといろんな形でうまく関係を作って、芸術・文化のジャンルを超えた連携ができ、みんなで磨き上げていくことが必要ではないかと考えています。



市民に声をかけながら会場内を歩く市長
(市民まつりにて)

——ところで、ステージアップは「学ぶこと」をテーマにした情報誌ですが市長にとって「学ぶ」とはどういうことだと思われますか。

市長 「学ぶ」ということは自分で考えることなんです。孔子の言葉に「学んで思わざればくらし、思うて学ばざればあやうし」というのがあります。まず知識を身につける必要がある。先人たちが勉強したものを参考として受け入れ、そのうえで、自分の力でいろんなものを集約させて、建築物のように仕立て上げていく、学びとしてはそれが一番大事なんです。子どもの創造性はまさにそこにあるわけですからね。学ぶということは、積極的に自分が知恵を獲得していくことです。だから、教えてもらう場所に行くとか行かないとかは関係ないです。学校に行こうが行くまいが知恵のある人は知恵がある。先人が勉強したものを教わらないと孔子が言うように一人よがりになりますよね。客観性を持たせるためには、人がやったものを勉強する必要があります。

—そこまでいくには相当時間がかかるでしょうね？

市長 たとえば英会話を考えればいいんです。上達するには自分で英文を作ることですね。話すためには作文しなくてはならない。作文できる状態になるためには生の英語を聞いていた方がいいでしょうが、繰り返し文を作って表現することによって英会話が上達するのです。

市民力生かした 新たな学びの仕組み

—「学びとは出会いをものにする力だ」と聞いたことがあります。これまで歩んでこられた中で、ご自身に大きな影響を与えた人物や本などとの出会いはありますか。

市長 自分で知識を習得するために努力しても自ずと限界があります。出会いというのは、枠から離れた知識の窓口が開ける可能性がありますね。そういう意味で重要です。私は、どちらかというともとの出会いですね。中学3年の時の受験参考書かな。これは知識がいっぱい詰まった本です。理科や社会では知らないことがいっぱい書かれてあって「こんなものがあるのか」と驚きでしたね。

あとは歴史書ですね。時代の大きな流れを解明したような本、アーノルド・トインビーの本を読むと素晴らしい発見しているなと思います。学生時代は哲学や宗教の本をたくさん読みました。特定の人に傾倒したのではなく、いろんな人の考えに触れました。西洋哲学でも東洋哲学でもこれはいいなと思うことを自分なりに吸収していったという感じです。

—かわさき市民アカデミーではたくさんの方が生き生きと学んでいます。その人たちに期待することは？

市長 お金をかけて勉強したわけですから、習得したことを自分ひとりの財産としないしてほしいですね。もちろん生きがいになることはとてもよいことですが、そのためだけだったらあんなに経費をかけられない。実際に市民生活に役に立つようなものを勉強してもらいたい。地域活動のリーダーになるように勉強をしていただけるなら経費をかけてもよいと思います。税金の使いみちは、あくまでも社会的波及効果の多いものに限定していきたいですね。

—個人の学びに終始するのではなく、広がりを持つことも大事ということですね。

市長 そうですね。それともう一つは、市民の中には、学ぶ以上に教える力のある人がいっぱいいます。大手企業の幹部を経験してリタイアした人、自分で会社経営し後進に道を譲った人、役所のOBなどはノウハウをたくさん持っています。ですから、そういう人たちを中心に、自主的な研究会を

作って、自分たちが持っている知識を他のグループに提供すると同時に、他からも自分たちにはないものを得る。実際の科目プログラムも、学んでいる人たちの中から作っていくのが望ましい。むしろそういう方たちの活躍の場として市民アカデミーを活用していきたいというのが私の考えなのです。



—そのノウハウを交流させて、相互乗り入れをしたほうがよいのでは、ということでしょうか。

市長 そうです。それぞれのノウハウを持っている人たちに集まっていただきます。その中から取りまとめをするのが上手な人たちが、全体の仕組みを作る企画担当になる。専門的な知識や能力を持っている人たちが講師になる。そしてお互いまず教えあう。それから「グループでこういうことをやっていますよ」と多くの人にお知らせする。そこで勉強したい人たちが集まって講座が成り立つ。そうすると2000円前後の会費で研究会のような形が十分に成立するわけです。

—人や組織をつなぐ調整役が必要ですね。

市長 コーディネートをしたい人やそれが得意な人はいっぱいいますよ。そういうグループを作って、企画委員会を作っていけばいいと思うのです。そこが機能するまでの間は、行政がコーディネートしないとイケない。だから出発点になるコンセプトや新しい仕組みの市民の学びの場づくりを、「生涯学習部でやるように」と言っているのです。

—川崎は人材が豊富で潜在能力があるので、それを生かす仕組づくりが課題ということでしょうか。本日はご多忙のところありがとうございました。

阿部 孝夫 さん (あべ・たかお)

1943年、福島県生まれ。67年、東京大学法学部卒業。自治省入省。73年、在サンフランシスコ日本国総領事館副領事・同領事。76年、自治省税務局府県税課・課長補佐。77年、茨城県総務部財政課長。79年、自治省財政局公営企業第1課課長補佐。81年、自治大学校教授。82年、石川県企画開発部次長・同部長。84年、環境庁企画調整局環境管理課長。92年、北陸大学法学部教授。96年、高崎経済大学地域政策学部教授。2000年、法政大学社会学部教授。2001年11月、川崎市長。趣味はカラオケ、史跡めぐり。座右の銘は「徳不孤必有鄰」(徳は孤ならず、必ず隣あり・論語)。多摩区中野島在住。

●アカデミー●

空と陸の最先端技術を間近に

かわさき市民アカデミー「友の会」野外研修会報告

2月25日、かわさき市民アカデミーの会員組織「友の会」主催の野外研修会が行われ、77人の会員が参加しました。一行は「全日空機体メンテナンスセンター」と「日産自動車横浜工場」を訪ね、飛行機や自動車の精密技術をつぶさに見学しました。ここで、参加者の感想を紹介します。

野外研修会に参加して

02政治国際 中村 廉三

4月ごろの陽気となった25日、友の会主催の野外研修会に参加しました。今回は飛行機と自動車という身近な乗り物の、日頃は見られないところが見学できるということで希望者が予定を上回ったようですが、幸い希望が叶えられました。

午前中「全日空機体メンテナンスセンター」へ。羽田空港のたくさんの飛行機群を横目に目的地に到着。最近の世情から警戒が厳重だと聞いていたので、緊張して建物に入りました。まず、担当の方から飛行機の種類、名称、構造、燃料（搭載場所や量など）のほか、なぜあの大きな飛行機が飛ぶのか、模型による実験を交え、ユーモラスにわかりやすく説明していただきました。

整備中の「777」を機体の下からながめ、その大きさに圧倒される（大竹公子さん撮影）



いよいよ整備現場の見学です。全員ヘルメットをかぶり格納庫に入ると、巨大な機体が目に入りました。普段は乗客としてタラップからすぐに機内に入りますが、手の届くところに胴体や翼を見ると、圧倒され改めてその大きさを感じました。機体各部の名称と機能について細かな説明を受けました。安全と効率を考えた工夫が随所にされることがわかり、飛行機への信頼性がより確かで身近なものになりました。

次に訪れたのは「日産自動車横浜工場」です。この工場は、当社創業の地にあってエンジンとアクスル（車体）部品を作っており、創業当時の事務棟を利用したエンジン博物館には、当社の歴史と歴代のエンジンが紹介されています。企業の合併統合の歴史と70年の苦勞のあとがよくわかりました。また、ゴーン社長になって、展示の仕方にも細かく目が配られているということです。ロボットによる部品の運搬で流れるラインから、一日千台以上のエンジンが生産されるそうです。また、当社の環境に配慮したきめ細やかな取り組みに、共生社会の大切さを実感しました。

次に訪れたのは「日産自動車横浜工場」です。この工場は、当社創業の地にあってエンジンとアクスル（車体）部品を作っており、創業当時の事務棟を利用したエンジン博物館には、当社の歴史と歴代のエンジンが紹介されています。企業の合併統合の歴史と70年の苦勞のあとがよくわかりました。また、ゴーン社長になって、展示の仕方にも細かく目が配られているということです。ロボットによる部品の運搬で流れるラインから、一日千台以上のエンジンが生産されるそうです。また、当社の環境に配慮したきめ細やかな取り組みに、共生社会の大切さを実感しました。

生涯学習ア

平成16年度 夜間校庭開放が始まります

社会人や地域の方々のスポーツ・レクリエーション活動の場として、市内7校の校庭を開放しています。

【利用できる団体】

市内在住・在勤の方で構成される成人団体（概ね10人以上）で、登録を済ませている団体。登録は1団体につき1校で、重複登録はできません。

【申込み受け付け・団体登録手続き】

利用予定日の前月の第1土曜日に、下記の受付会場で行います（5月は第2土曜日になります）。

学校名	時間	受付会場
臨港中学校	13時半	教育文化会館
塚越中学校	14時半	
久本小学校	13時半	生涯学習プラザ
東住吉小学校	14時半	
菅生中学校	13時半	宮前市民館菅生分館
南生田中学校	15時半	新百合21ビル地下2階 生涯学習振興事業団
麻生小学校		

【開放期間・利用時間】

4月1日～12月20日の月曜～土曜と祝日。18時～21時まで（塚越中は19時から、南生田中は18時半から）。

【費用】

夜間照明の電気代(30分で500円)は利用者負担です。

問い合わせ 学習推進室 ☎044(733)5572

●さがす●

情報がいっぱい「電子掲示板」

市内44カ所の公共施設に設置されている利用者端末「ふれあいネット」には、施設情報、団体・グループ情報など12種類の学習情報が入っています。その中に「電子掲示板」という項目があります。音楽、語学、文化・文芸、スポーツ・レクリエーション、生活・趣味など8つの分野に分かれており、短期の催し物、講習会、健康診断の日程など、皆さんの生活や学習に役立つ情報がたくさん入っています。

団体・グループの催し物・活動情報なども「電子掲示板」に載せることができます。600字以内に内容・連絡先（住所・氏名・電話番号）を明記して、学習情報室宛にお送りください。Faxでも結構です。また、自宅のパソコンを利用して情報を載せることもできますが、その場合は「ふれあいネット運用センター」（☎044(200)8416、平日9時～17時受け付け）への利用者登録が必要となります。

問い合わせ 学習情報室 ☎044(233)6250/Fax(233)2700

※このコーナーでは勸川崎市生涯学習振興事業団の事業や関連施設の紹介をしています。

ラ・カルト

●はぐくむ●

学校施設開放の利用状況

川崎市では、児童・生徒の遊び場として、また青少年、地域住民の方のスポーツ・余暇活動などの生涯学習の場として、学校施設（校庭・体育館・プール・特別教室）を学校の教育活動に支障のない範囲で開放しています。



練習に励む地域のサッカーチーム
(向ヶ丘小学校の校庭にて)

平成14年度の開放は、〔表1〕の通りの学校数で各学校施設を開放しました。

また、利用人数は〔表2〕の通りです。のべ人数にして160万人を超える利用がありました。

〔表1〕 学校施設開放校数 単位：校

施設 学校	体育館	校庭	特別 教室	プール 団体	プール 個人	夜間 校庭
小学校	113	113	40	71	20	3
中学校	46	38	20	1	0	4
合計	159	151	60	72	20	7

〔表2〕 学校施設開放利用人数集計表 単位：人

施設 学校	体育館	校庭	特別 教室	プール (団体・個人)	夜間 校庭	合計
小学校	730,019	580,298	43,250	40,247	8,718	1,402,532
中学校	167,763	31,685	23,484	300	10,215	233,447
合計	897,782	611,983	66,734	40,547	18,933	1,635,979

平成16年度も学校施設開放を行います。申し込みは各学校で受け付けますが、学校によって開放する施設が異なります。詳細は「学校施設開放ごあんない」パンフレットをご覧ください。パンフレットは、市内の各公共施設の情報コーナーなどに置いてあります。

問い合わせ 学習推進室 ☎044(733)5572

ハート & ハーモニー Vol.41

自分のための転倒予防

何事においても、転びたくて転ぶ人はいません。思わぬ所にある転倒の危険を避ける危機管理は、完璧を期する事は無理ですが、特別な予防対策よりも日常生活の課題と考えた方が良いでしょう。

事故や疾病の「予防」には5つの段階が考えられています。検診に代表される「早期発見、早期治療」は二次予防と呼ばれ、病気の宝探しに似ています。病気による損失は食い止めても、病気そのものは減りません。三次予防の拡大防止（医療）、四次予防の機能回復（リハビリテーション）は本来の予防のイメージではありません。

生活悪習慣などに着目して、個別の病気の発生や進行を押さえることは、一次予防と呼ばれます。対策の立てられている病気はたくさんありますが、それぞれを忠実に守ろうとすると矛盾が生じる場合すらあります。一～四次予防は個人の健康づくりよりも、医療費などの社会的後始末対策の観点が強いように感じられます。

疾病などのマイナスイメージを意識しないのが、0次予防（健康づくり）と呼ばれる分野です。健全な保健行動を基礎にした、健康的な身体と社会を演出することは、病気の裏返しではありません。快適な生活のための清浄な空気や清潔な環境は、そのまま多くの疾病予防に通じているだけです。

予防の考え方の象徴としては「転ばぬ先の杖」と言われますが、健康づくりのファッションとしての杖は、日本にはまだ定着していません。福祉機器の多くは困った人の補助として作られ、誰でも使える便利なものとして考案されていません。これでは使う人の心理的抵抗感が取れないのです。

転倒予防の基本は筋力の保持ですが、外出機会が多く身体を動かす人ほど、筋肉が保たれるのは当然です。高齢者ではバスに乗る回数でも、多い人のほうが元気です。この場合「受益者」は元気で居られる本人だけでなく、医療や介護の保険者（基金）でもあると考えられます。バリアフリーの街つなぎも、コストが軽い便利な街を目指すのが本来でしょう。

「転びたくはない」と意識をただけで、「滑らない」「つまずかない」注意や、筋肉・バランス・身のこなしの鍛練、便利な靴・杖・手すりの使用といった自分のためにできる事を越えて、広く社会の健康づくりに目を向けることができます。

「健康は個人と社会の重要な資源であり、健康開発は未来への最高の投資である」と信じます。

(スポーツドクター 野田 晴彦)

※「ハート&ハーモニー」は今回をもって終了します。

情報コーナー イベントパーク 講座・コンサート他

●中村正義生誕80年・春展

5月30日(日)まで、中村正義の美術館。正義の1961年までの、主に日展で活躍した時代の作品を中心に展示。写真は1951年の作品。一般500円、高・大学生300円、小・中学生200円。開館日は金曜～日曜と祝日。11時開館。☎(953)4936。



●水の記憶ヒグマ春夫の映像試論展

4月11日(日)まで、岡本太郎美術館。現代にあらたなフィールドを開くヒグマの映像作品。「岡本太郎記念現代芸術大賞」展も同時開催。9時半開館。一般800円、高・大学生600円。中学生以下と65歳以上は無料。月曜休館。☎(900)9898。

●浮世絵展～東海道書画五十三驛展

4月19日(月)～5月17日(月)まで、川崎区の砂子の里資料館。芳虎、四代豊國他の作品。無料。10時開館。日・祝日休館。ただし5月1日(土)～5日(祝)は特別開館。☎(222)0310。

●ミニ画廊スナック「琴」①写真②おし花

①は4月17日(土)まで、伊藤忠・田辺文江の作品。②は4月17日(土)～5月1日(土)まで、桜井由美子の作品。場所は幸区鹿島田。作品の展示無料。☎(544)0507。

●ランチタイムコンサート

4月21日(木)12時15分開演、市役所第3庁舎ロビー。出演はプラス フロンティア(金管五重奏団)。曲目は「踊りあかそう」「浜辺の歌」他。☎(520)0100の川崎市文化財団。

●さつき寄席

5月23日(日)14時開演、川崎市民プラザ。神田紅の講談、春風亭柳橋の落語ほか。前売券1800円、小学生500円。4月1日(木)よりプラザフロント他で発売。☎(888)3131。

●講座①P.O.P広告②宅地建物取引主任者資格受験準備

①5月10日～6月24日の月・木曜18時15分から、全14回。場所は労働会館。販売促進について分かりやすい広告の仕方を学ぶ。定員25人。受講料12000円、教材費3000円。②5月25日～10月1日の火・金曜13時半から、全30回。定員35人。受講料35000円、教材費3000円。☎①は4月18日(日)②は4月25日(日)9時から電話で。先着順。☎(222)4416。

●青少年創作センター「初夏の創作教室」

①陶芸②七宝焼き③パソコン

①は5月15日～6月5日の土・日9時半から、全4回。1000円。②は5月9日～30日の毎日曜13時半から、全4回。教材費2000円。③は5月9日～30日の毎日曜9時半、全4回。200円。対象は①②小・中学生。③は小学3年～中学生。☎4月

12日(月)までに、往復はがきに教室名、住所、氏名、学校名・学年、性別、☎を記し、〒214-0034多摩区三田2-3303-1の同センター「初夏の創作教室」係あて。☎(911)1510。

●玉川大学公開講座

4月開講の「ガーデニングを楽しむ」「ヨーロッパのお菓子」「中国語入門」など11講座の受講生を募集。詳細は☎042(739)8895の同大学継続学習センター。

●日本女子大学公開講座

4月開講の「東洋医学の世界－漢方治療」「情報の歴史－ケータイのなかった時代」など29講座の受講生を募集。場所は同大学西生田生涯学習センター。パンフレットを無料で送付。詳細は☎(945)3323。

●清泉ラファエラ・アカデミア春期講座

4月12日(月)開講の▽英会話(小学生クラスも新設)▽スペイン語▽中国語▽マンドリン入門▽暮らしのマナー講座▽テニス・健康運動など34講座の受講生を募集中。場所は同大学宮前平キャンパス。受講料は1期12回、27600円～32400円。☎03(3447)5551の同大生涯学習センター。

●和光大学市民講座「オープンカレッジばいでいあ2004」

5月開講の「アジアの諸言語」「歴史」「芸術文化」など64講座の受講生を募集中。締め切りは4月19日(月)。資料請求随時受け付け。☎(988)1433の同大学開放係。

●難聴者のための入門手話講習会～要約筆記(OHP)つき

5月11日～6月22日の毎火曜10時、全7回。会場は中原区の川崎市聴覚障害者情報文化センター。対象は難聴者・家族・関係者25人。参加費500円。☎5月6日(木)までにFax、はがき、☎で。〒211-0037中原区井田三舞町14-16川崎市聴覚障害者情報文化センター団体交流室内「川崎市中途失聴・難聴者協会」。Fax(753)0596。☎(811)8657(会員宅)。

●入門点字講習会

6月1日～29日の毎火曜18時半から、全5回。場所は川崎市南部身体障害者福祉会館。初心者を対象にした基礎的な点字の学習。対象は市内在住・在勤・在学の20人(抽選)。費用は1580円。☎5月15日(土)までに往復はがきに住所、氏名、年齢、☎、「入門点字講習会希望」と記し、〒210-0834川崎区大島1-8-6南部身体障害者福祉会館まで。☎(244)3971。

●「川崎市子ども会議」子ども委員募集

子ども市民として意見交流し市政に提言する「川崎市子ども会議」の委員を募集。資格は平成16年4月1日時点で10歳～17歳の子どものみで、毎月第2・第4日曜に「川崎市子ども夢パーク」で開かれる定例会議に参加できる人。交通費支給。☎4月15日(木)までに☎(200)3309教育委員会生涯学習推進課。

●「川崎市子ども会議サポーター養成講座」受講者募集

4月25日、5月2・16・30日、6月6日の日曜10時～15時。会場は高津市民館他。無料。応募資格は平成16年4月1日時点で18歳以上30歳未満の方。☎4月15日(木)までに☎(200)3309の教育委員会生涯学習推進課。